

2011. 3. 11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた

《いいつたえ、むかしばなし、はなし》

－ その 4 －

宮城県教育委員会の委託を受けて「宮城県民話伝承調査」をおこなったのは、1985年から1988年の3カ年でした。いまから、30年ほど前のことになります。

その時に、聞き書きした宮城県各地の民話は2513話、民話を語ってくださった方は388人に及びました。

これらの記録は、『宮城県文化財調査報告書第130 - 宮城県の民話 民話伝承調査』（1988年3月刊）としてまとめ、宮城県教育委員会から出版されましたが、当時の区割りによる74市町村から、3話ないし5話を選んで活字化するという形でした。したがって、集めた民話の約1割に当たる274話のみの収録となりました。残りの2200話あまりの民話の記録と、語ってくださった話者の声は、わたしたちの手許に置かれたままでした。

これらの貴重な記録と語られた声は、わたしたちが採訪して聞き集めた他の民話とともに、目下、「民話 声の図書室」の大切な材料として、みなさんと共有すべく作業をすすめています。

いま、ここに紹介する民話は、かつて「民話伝承調査」をおこなった時に聞いたものであり、2011年3月11日、津波に襲われて、被災した集落で語られていた民話です。語った方の大部分は、震災の前にすでに亡くなっています。そして、語られた土地の姿はいま変わり果てました。若い人の多くは、浜を去ることを余儀なくされていると聞きました。

しかし、手許に残った語りは、かつてここで生きていた人々の姿を、ありありとわたしたちに伝えてくれます。それは、この土地特有の話もあれば、そうでないものもあります。日本民俗学が分類した口承文芸の分野に属する典型的な話型が、「実話」として語られていることも見逃せない大事な点です。人々の暮らしがいつも「物語」とともにあったことを教えてくれます。

それらすべてを含めて、「この土地で語られていた民話」という括りでまとめてみました。

よその土地からもたらされた話や、隣町での出来事を語るものや、遠くの島のいわれを教える話や、全国的に話型がみられるものがこの土地らしい姿で根付いた話など、さまざまな方法でムラに蒔かれた話の種が、語り継がれていたのです。

本展は、「2011.3.11 大津波に襲われた沿岸集落で、かつて聞いた《いいつたえ、むかしばなし、はなし》」というテーマのもとに、シリーズで、みなさんに届けていく計画です。

一回目は本吉郡南三陸町戸倉で聞いた語りの中から8話を、二回目は石巻市雄勝町周辺で聞いた7話を紹介しました。また、三回目は気仙沼市本吉町小泉、津谷の民話を8話紹介しました。今回は、本吉郡南三陸町歌津周辺で聞いた民話を紹介いたします。

本吉郡南三陸町歌津周辺の民話

- 第一話 オオカミに負けない
- 第二話 ものいう魚(1) コダシ沢のまさ坊
- 第三話 ものいう魚(2) サメツ淵^{ぶち}のまさ坊
- 第四話 ネコの酒盛り
- 第五話 ネコの義太夫^{ぎだいゆう}
- 第六話 ごんすけギツネ
- 第七話 法印さまとキツネ(1) 法印さま、沼に落ちる
- 第八話 法印さまとキツネ(2) 法印さま、川にどんぶり
- 第九話 笠忘れ
- 第十話 膳の湯は飲むもんだ
- 第十一話 歌くらべ

(記録 小野和子)

本吉郡南三陸町歌津周辺で聞いた民話より

第一話

オオカミに負けない

おれのじいさんが若い頃の話だと言っていたが、伊達の家臣で力の強いお侍がいたんだと。その人は剣術も柔もよくやった人だそうだが、あるとき、なにか用事があって、こちらのほうに来たんだと。

そして、ほれ、その峠まで来たとき、日も暮れてきたし、疲れてもいたから、休んだところ、オオカミがその人を狙って、やってきたっつうんだ。

相当の数のオオカミが来て、山の両方の稜線にいて、ウーッウーッって、うなり声をあげてねらっているんだと。

「こいつあ、困ったぞ」

追いつめられて、これでおしまいかと覚悟をきめたときに、

お侍は、昔からの言い伝えを、ふと思い出したと。

オオカミつうのは、まず、狙った人間の上を、ぴよんと飛ぶ。飛びながら、ぴゅーっとその人の眼に小便ひっかけてよこすんだと。

この小便がくせ者で、ふしぎな力を持っているんだと。どうしたわけだか、その人は眼がくらくらして、なにも見えなくなって、おまけに頭がぼうっとして、気を失ってしまうんだと。

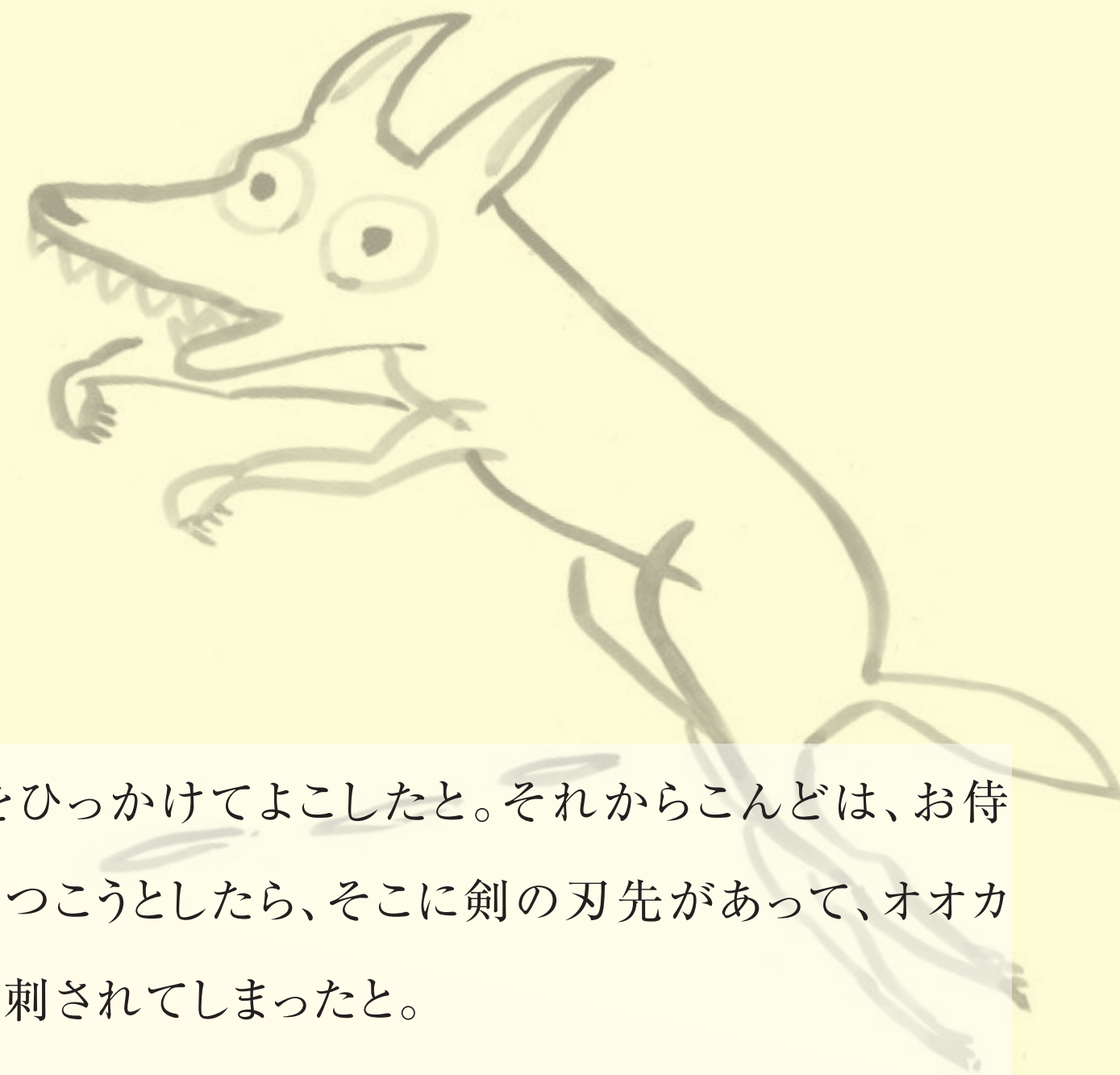
「そこをオオカミが喰らいつくんだ」

そう聞いていたことを思い出した。

んだから、お侍はまず、ぐっと眼をつむって、オオカミに小便をひっかけられないようにしたと。そして、刀を抜いて、鋭い刃先を上にして、自分の脇に立てかけた。

「さあ、こい」

待っていると、そうとは知らないオオカミが、お侍の上を飛



んで小便をひっかけてよこしたと。それからこんどは、お侍さんに食いつこうとしたら、そこに剣の刃先があって、オオカミはぐさりと刺されてしまったと。

つぎつぎと襲ってきたオオカミは、こうして、一匹やられ、二匹やられ、三匹やられ…夜明け方になったら、なんとオオカミが何匹も、そこに死んでいたんだと。

お侍さんは、命拾いして、無事に帰っていったそうだ。

そんな話、じいさんから聞いたよ。

第二話

ものいう魚(1)

コダシ沢のまさ坊

これもじいさんに聞いた話だが、昔は白米のご飯なんて食われねえから、いつでも麦が入っているんだ。麦なんかいいほうなのさ。芋だのツル草だの豆だの、とにかくなにかを入れてかてめし糧飯にして量をふやしたもんだよ。米が三、糧が七という割合だから、米粒を探すのがたいへんさ。まあ、それでも食えるだけでしたのさ。

ところで、あるとき麦をご飯に入れるからって、まず、臼で搗いたのさ。

搗いたって、麦の皮は堅くて残ってしまうから、そいつを、こんどは煮るのしゃ。

そうすると、皮が二つに裂けて取りやすくなるんだ。食べやすくなるんだよ。んで、こんどは、煮たやつを川の水に浸けてさわしておくんだよ。柔っこくするためにしゃ。

ある人が煮た麦を水に浸しに、川さ持っていった。ところが、そこに大きな魚がいたんだと。麦から出てくるうまい汁を吸いたくて、魚たちが集まってくるんだね。

「馬籠まごめから、甥っこが手伝いに来てくれた。あいつが帰るときの土産にこの魚を持たせるべ」

そんなことを言って、甥っこに持たせるために、その魚を捕まえたんだと。

大きな魚だったから、コダシって、藤のつるで編んだ背負いカゴの中に魚を入れて、甥っこにそれを背負わせて、馬籠へ帰すことにしたんだと。その人も、途中までついていったと。

そして、二人で峠を越えて、沢のあたりに出たら、なんだか、ブツブツと話しているような声が聞こえてくるんだと。

「おかしいな。おれとお前の二人だけだし、だれも声を立てていねえのに、話し声がするなあ」

首をかしげていると、またブツブツと話し声がするんだと。お不動様から500メートルほど行ったところに、二本杉というところがあるんだが、そこは三叉路になっていて、道が三方にのびているんだ。

その杉の木の下を過ぎるところまで来たら、沢の水がざわーっとゆれて、
「まさ坊や、まさ坊や」

呼ぶ声が聞こえたんだと。こんどははっきりとね。沢の中から、その声は聞こえるんだと。
「まさ坊や、まさ坊や。どこさ行く」

また、聞こえる。

そうしたら、たまげたねえ。背中の魚が答えたんだと。「けさ坊や、けさ坊や。おれは、これから馬籠さつれていかれて、すり身にされて食われるが、おめえは、いつまでも長生きしろよ」

二人は、まず、たまげた。たまげた。魚がしゃべったんだからや。

背負っていた魚をコダシごと、沢の中にぶん投げて、わらわら逃げ出したと。

ものをいう魚を、コダシに入れたまんま、ぶん投げたから、そこをだれいうともなく「コダシ沢」と呼ぶようになったんだよ。

第三話

ものいう魚(2)

サメッ淵ぶちのまさ坊

まごめ馬籠の人で、魚売りをしている人がいた。

歌津の浜で魚を買って行って、それを、あっちやこっこの部落で売るのがね。

サメの獲れる節には、やってきてサメを買っていくわけなんだ。

イサバスゴ(魚売りが使うゴザのようなもの)というものがあってね、そのスゴにサメをくるんで運ぶのだが、魚はすべって落ちやすいからね、頭と尻をぎっちりゆと結わえて、ウマの荷鞍のまん中に結つけてくるわけさ。

その人は、サメを一匹買って、ウマに付けて浜から山道へ来たわけだ。

たきのうえ滝上というところがあって、岩の上に滝から落ちた水が流れているところがあるのさ。

そこに来たら、なんだか、ゴゴ、ゴゴって音がしてきたので、馬を止めたれば、その滝を大きな魚がのぼってきたんだと。そして、水が落ちている淵まで来て、「まさ坊や。まさ坊や」って呼ぶんだと。

魚売りの人は、「おれ、まさ坊という名前でねえが、だれのこと呼んでいるんだべ」って、あたり見ても、だれもいねえの。

大きな魚が、また呼んだんだと。「まさ坊や。まさ坊や」

そうしたらね、馬に付けていたサメが、なんとなく動いたように見えたっつんだよ。

魚売りの人が見たら、目玉を動かして、そいつが返事したんだと。

「はい。はい」

そうしたら、淵にいた大きな魚がね、また、「まさ坊や。まさ坊や。おめえ、どこさ行く」って言うんだと。そしたらね、「なあにな、運悪いことに、浜の漁師に獲られて、馬籠ですり身にされて食われるんだ」って答えたんだと。

見れば、目玉動かして、人の言葉しゃべっているんだと。おっかなくてね、とうとう淵の深いどこへ、馬に付けてきたサメをぶん投げて逃げてきたんだと。

そこをね、いまでも「サメッ淵」と呼んでいるんだよ。

第四話

ネコの酒盛り

むかし、このあたりに三匹のネコがいた。

国が森には三毛ネコがいた。

田東山には唐ネコがいた。

貞任山には虎ネコがいた。

この虎ネコが、このあたりの大親分ネコなのじゃ。

ある日、大親分のネコが、なにか相談ごとがあるからって、みんなを集めて、酒盛りはじめたんだと。

その相談というのが、いつも餌をもらっている庄屋さんの娘のことだったと。

その娘が、それはきれいな娘であったために、代官みたいな悪いやつに目を付けられてしまったと。都から来たいやなやつさ。いつもやってきて、娘をわがものにしようと

して、庄屋を困らせているんだと。

それを聞いて、たのまれたわけでもねえが、ネコどもは相談はじめたんだと。

「いっつも世話になってっから、庄屋のおやんつあんを助けるべ。なんとか、娘をやんねえ工夫はないものか」

三匹は頭をよせて、相談したところ、いろいろと智恵が出たと。

「化けネコになって、行灯の油をなめたらどうだべえ」

「すすり泣きしたりしてみせたらどうか」

「いやいや。あっちこっち、搔いたり、ゆすったりして、代官を怖がらせるのはどうか」

ところが、いよいよとなったら、親分の貞任山の虎ネコが、京都で寄り合いがあって、そっちへ行ってしまったんだと。

そのあいだにも、代官は毎日やってきて、

「娘、よこせ。娘、よこせ」

うるさいから、とうとう、庄屋のおやんつあんも負けて、いよいよ娘をやることにしたんだと。

「これはたいへんだ」

こっちにいた二匹は、すぐにネコの靈感をつかって、京都の親分のところへ連絡したところが、親分は、

「よし。早めに帰るから心配するなよ。そっちはそっちでやっておけよ」

こういう返事だったと。

こっちの二匹は、割り当てをきめて、三毛ネコは、行灯の油をなめることにして、唐ネコはお化けの真似して、ヒーヒーと泣くことにしたんだと。

そして、代官が娘を引っ張りこんで、いたづらしようとする、二匹して、それぞれに割り当てのやり方で脅かしたんだと。

それでも、親分がいねえから、なかなかうまくいかねえ

んだと。迫力が、いまひとつねえのじゃ。そこで、二匹は声を張り上げて唄ったと。

くーにが森の さんけネコ

たつかねさんの からのネコ

さだとうやまの とらのネコ

はやく こーう はやく こーねば

まあだ 調子が そろわねえ

そーそっぴー そうそっぴ

そーそっぴー そうそっぴ

唄う声が聞こえたんでねえべかな。

東の空がぴかっと光ったと思ったら、京都にいた親分ネコが飛んできたんだと。

「やれ、よかった。よかった」

二匹は喜んでや、こんどは三匹で、なおさら声を上げて唄ったんだと。

その声があんまり大きくて、

どん ごろごろごろー

どん ごろごろごろー

地響き立てるから、代官は、まず、たんまげたと。

そして、思わず娘の手を放したから、娘は娘で、その隙に、縁側に逃げ出したんだと。

それを代官が、「待て、待て」と追いかけてきたのはいいが、つんのめって縁側から落ちて、敷石に頭をぶっつけて、そのまま死んでしまったっつうわけじゃ。

庄屋は喜んで喜んで、ネコたちにどっさりのご馳走と酒を振る舞ったと。

三匹のネコたちはあの唄をうたって、その晩は、いつまでもいつまでも盛大に酒盛りしていたんだとじゃ。

くーにが森の さんけネコ

たつかねさんの からのネコ

さだとうやまの とらのネコ

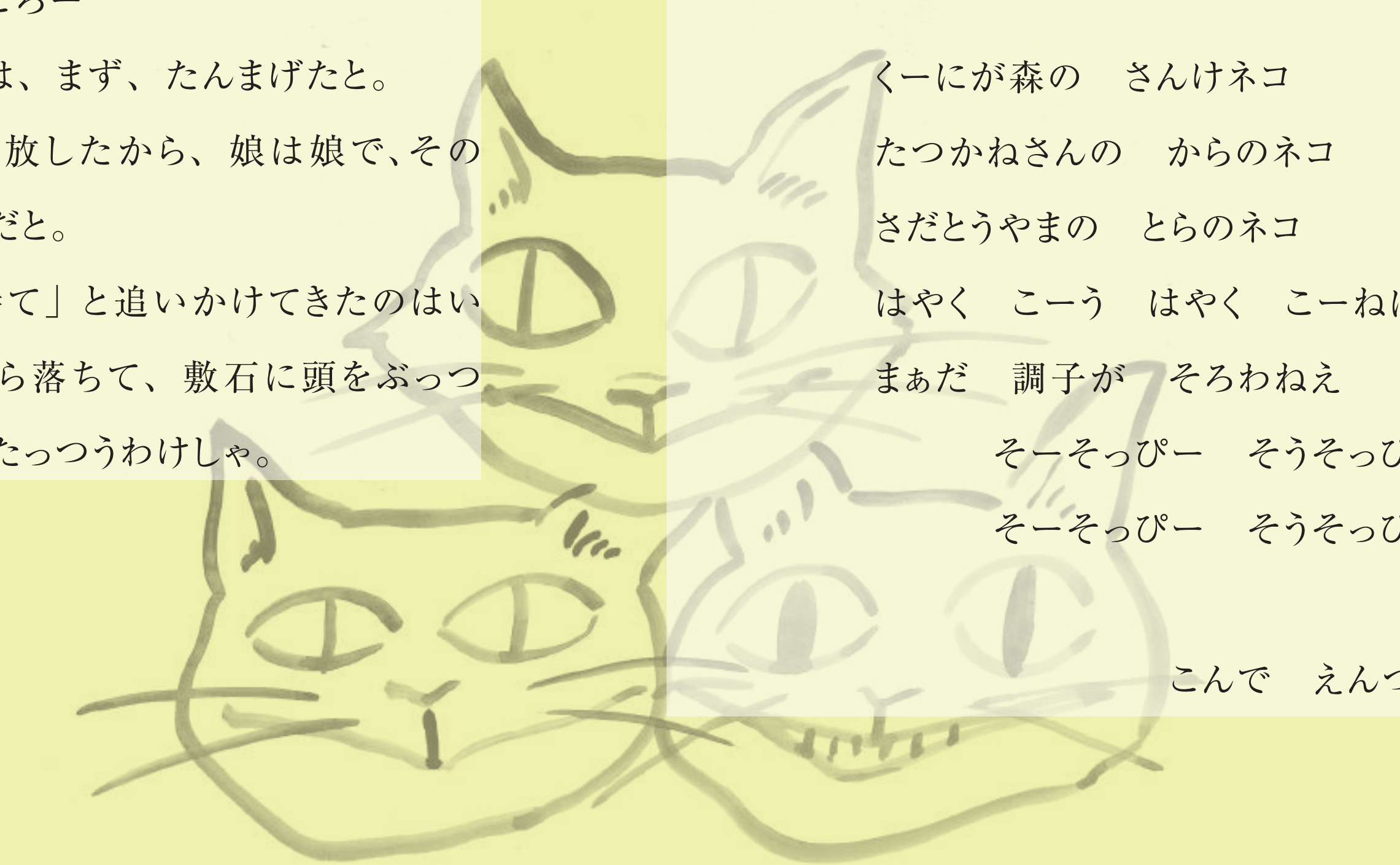
はやく こーう はやく こーねば

まあだ 調子が そろわねえ

そーそっぴー そうそっぴ

そーそっぴー そうそっぴ

こんで えんつこ まんまん



第五話

ネコの義太夫

むかし。^{ぎだいゆう}義太夫がはやってね。

上沢の部落も、^{じょうりりがた}浄瑠璃語りが来るといので、みんな
で聞きにいったんだと。

「浄瑠璃語りが来たぞ。行くべ。行くべ」

こっちの部落からも、そっちの部落からも、みんなさそ
いあって、上沢の部落へ浄瑠璃を聞きにいったんだと。
ところが、隣のばんさま、どういうわけだか残っていたん
だと。

気がついたら、隣近所の人たちは、みんないなくて、
ここにいるのは^{さんけ}三毛ネコと自分だけだったから、とっても
さびしくてやあ、



「三毛や、三毛や。みんな義太夫聞きにあって、おれ
とおめえばかりだ。さっぱりけっぱれねえなあ（元気が出
ないなあ）」

こう言ったんだと。

三毛の頭を撫でながら言ったんだと。

そしたれば、ネコのやつ、

「ニャオーン」

とないて、いなくなったかと思ったら、こんどは、手拭
いで頬っかぶりして出てきたんだと。

そしてね、たまげていい声出して

「ああん、あん、あん、あん、あーっ」

って、身体をくねらせながら、浄瑠璃語って、ばんさま
に聞かせたんだと。



これ、ほんとうにあったことだって聞いたよ。

ネコが、いい声で浄瑠璃語ったんだってよ。

第六話

ごんすけキツネ

ここ猿跳ざるばねに沼があった頃のことだ。

沼のそばに小屋かけて、じんつあんとばんつあんが住んでいたと。

おれたちの先祖だと思ふのだが、海で海藻を採ったり、沼っこで魚を獲ったりして、暮らしていたんだと。

冬になって、雪が降って外に出られないから、笹竹を束にして沼に入れておくのじゃ。そうすると、その笹竹の葉っぱにエビだのフナだの寄ってくるから、それを掬って上げるわけじゃ。

ところが、それをごんすけキツネが見ていて、じんつあんよりも先に行って、引っ張り上げて、食ってしまうようになっ

たんだと。

それで、じんつあんも考えて、笹竹をたばねて沼に入れると、ずっとそばにいて、魚がかかった頃を見計らって、ついと引き上げてしまったんだと。

そんなことを何日もやっているとき、ごんすけキツネは、さっぱり餌にありつけないから、腹空すかしてやあ、ある日のこと、笹竹のかわりに自分の尻尾を沼の中に入れて、魚が寄ってくるのを待っていたんだと。

「ほだ、ほだ。じんつあんが言っていたけど、ピリピリと音がなるように凍ってきたら、魚がつくんだって、そう言っていたな」

そんなことを独りごととして、待っているうちに、水が凍ってきて、しっぽのあたりがピリピリとなってきたんだと。

「ようしっ、魚くっつかったな」

そう言って、しっぽを引き上げるべとしたが、水が凍ってしまったから、しっぽは抜けないんだと。いくら引っ張っても、出てこねえんだと。

そのうちに、東の空が白んできて、人の影が見えるようになったんだと。

「これは、たいへんだ。はやく姿を隠すべ」

ごんすけキツネは、しっぽを抜こうとしたが、いくら引っ張っても抜けねえんだと。

じんつあまはそれを見て、棒きれ持って見に行ったんだと。「この、ばかやろう」

キツネのどこを叱ると、キツネはてっきり殺されると思って青くなっていたけど、そうではなくて、じんつあまは、キツネを引っ張り上げてやって、

「おめえは、いつもおれの魚をだまって盗ったな。欲しけ

りゃな、そう言えばくれてやるんだぞ」

こう言ってさとして、家さ連れて行って、別な魚を食わせてやって、火にもあたらせてやったんだと。

それがうれしかったのか、ごんすけキツネは一生いたづらをしなかったんだと。そして、魚を獲るときは、おじんつあんを手伝ってくれるようになったんだとや。

こんで えんつこ まんまん

第七話

法印さまとキツネ(1)

法印さま、沼に落ちる

むかし、むかしの話だからね。

三月に法印さまがたつかねさん田東山の十九日のお勤めするために、ホラ貝を背負って山を登っていったって。

浜からずっと山岸を通過して、小さい集落を過ぎると、川っぶちへ出て、そこをずっと行くわけなのじゃね。しばらく行くと、奥州街道の十字路になっているどこがあって、そこに供養碑があって、松の木が一本植えてあるんだよ。

法印さまがそこに来たところが、キツネが寝ていたっつうんだ。

それで、おもしろ半分に、ホラ貝で、ブーッとおどかし

たところが、キツネは六尺ばかり飛び上がって、それから、山のほうに逃げていったというわけじゃ。

それから、いそいで田東山さ行って、お勤めをして、どぶろくを飲んで、いい機嫌になって、また松の木の下まで来たんだと。

そうしたら、なんだか急にあたりが真っ暗になったっつうんだね。

「これはおかしい。まだ、夜になるわけではない」

法印さまは向こうのほうを見たら、明かりが見えたんだと。あの明かりが町だろうと思って、明かり目指して、どんどん歩いたら、お堂があったんだと。

「こんなところにお堂があるわけではない」と思ったが、とにかく眠くなってしまって、そこに入って寝てたんだと。

そうしたら、なんだか、外のほうで、ガヤガヤと人の声があるんだと。

「はて、なんだろう」

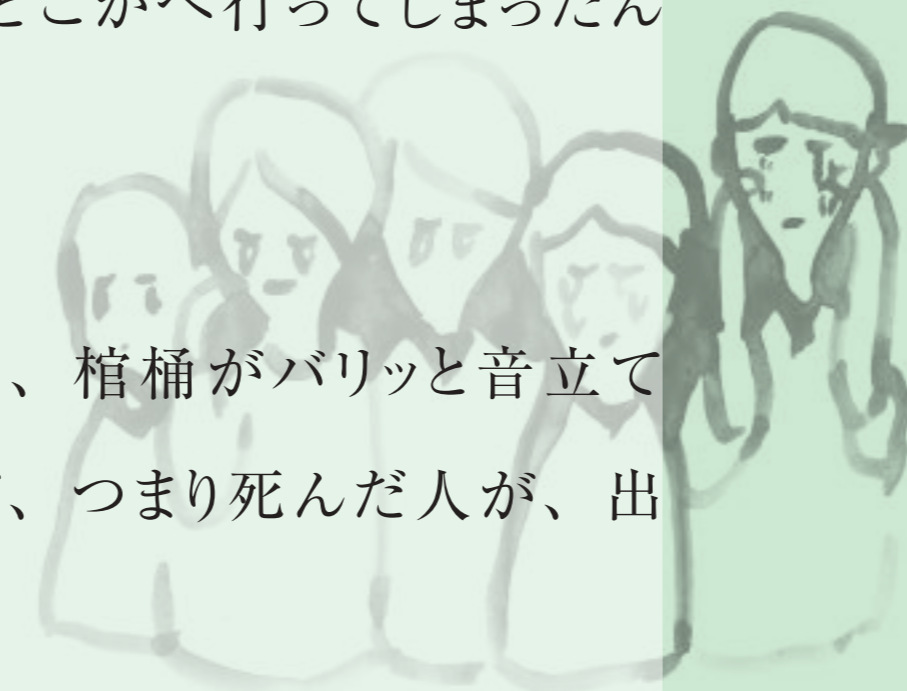
首をかしげて見てみたら、棺桶かついだ人たちがどやどやと入ってきて、そこにドスンと棺桶を置いて、みんなで泣いたり、さわいだりしてから、どこかへ行ってしまったんだとね。

「おかしいなあ」

法印さまは、そう思っていると、棺桶がバリッと音立ててぶっこわれて、中から仏さまが、つまり死んだ人が、出てきたっつうんだよ。

おっかなくなって、逃げ出したんだと。追っかけてくるんだと、どこまでも。

外には松の木があるから、そこに登って隠れるべとした



ところが、松の木に登っても、あとからついてくるんだと、死んだ人がね。

どこまでもどこまでも、ついてくるから、おっかなくてね、こんどは松の木から飛び降りたんだと。そしたら、そこに沼があって、法印さまは、沼の水の中でアップアップして、びしょぬれになってしまったんだと。

この日は旧の三月十九日だから、今の四月の終わり頃だね。

その頃は、田仕事が始まって、田圃の畔塗りがくろぬ始まっていたのよ。

法印さまが田の畔を通過して、池の上の松の木に登ったのを、田仕事の人たちがみんなで見っていたのさ。

「なんで、いまごろ松の木に登って、そこから落ちてやあ、

そして沼さ入って、『助けてくれー』って叫んでいるんだらうな」

みんなは、首をかしげながら、法印さまを沼から引っ張り上げてやったんだと。

法印さまは、ぶるぶる震えて言ったんだと。

「死人に追われて、つかまりそうになったから、松の木に登って逃げて、そして沼さ落ちたんだ」

みんなは、おかしくて笑ったけど、なんのことだかわからなかったんだと。

これは、法印さまにおどかされたあのキツネの仕返しだったのさ。

はい　こんで　おしまい

第八話

法印さまとキツネ(2)

法印さま、川にどんぶり

むかし。法印さまは「おまぶり」と言ってな、部落をまわって、一軒一軒たずねて祈祷して、お守りの札を置いていくもんだったと。

それがあると家内安全とか無病息災とか、そういうご利益りやくがあるって信じていたから、お札をもらうと、一銭とか二銭とか、わずかだけどお金やったり、米を茶碗に一杯やったりしたもんだよ。それをもらうと、法印さまは、またつぎの部落へ行くわけだ。

ある日、法印さまが山を登ってきたつおん。

山の入り口のどこに川が流れていて、まん中あたりに水がよどんでいて、深くなっていたんだと。そのよどんだ水の

まん中に、タタミ三枚敷いたくらいの平らな岩があるんだよ。

法印さまは、何気なくそっちを見たら、大きな赤いキツネの畜生が、その岩の上で昼寝してたつおん。

「野郎、たまげらかしてくれっぺ」

法印さまは、大きな石をひろって、いきなり川の中へ投げたっけ、キツネ、たまげてや、水の中に、どぶらと入ってしまったつおん。

「いいざまだ」

法印さま、笑いながら、山道を登って部落まで行って、一軒また一軒と回って、まずお茶っこ飲んだり、どぶろく飲んだりして、一番終わりの家に来たつおん。

そうしたれば、まだそんな時間でもねえのに暗くなってきたつうんだね。

「これは困った。どこかで松明たいまつでももらっていかねえと、とっても暗くてわからねえ」

そんなことを言って、部落の細道登って、残っていた終りの一軒の前に来たんだと。

「こんばんは」

入っていったれば、じんさまが出てきて、言うんだと。

「なに、法印さま、遅いこたあ、今頃来たのかや」

「どこの家でも、どぶろくを出されたから、酔っ払ってしまったわや。ところで、ばんさまの姿が見えねえが、なににござったや。ばんさまはどこかに行ったのか」

法印さまが首をかしげて聞いたれば、じんさまが言うんだと。

「なに、このあいだ、ばば、風邪ひいて、とくと痩せてやあ、奥で寝ったけづおん」

「おお、そうすか」

「とにかく、うまくねえどもお茶っただけでも飲ませい」

じんさまはお茶を出して、それから、お礼に米っこくれたんだと。

「では、帰るから」

法印さまが立つべとしたら、

「えへん、えへん」

ばんさまの咳する声がしたから、法印さまは、

「ばんさま。ばんさま。いつも顔見ていくんだから、顔ばりでも見せさいや」

そう言ったら、ばんさまが、答えたんだと。

「起きんのいいごったら起きるけど、起きらんねえ」

「んだら、手っこばりでも見せてくれや」

法印さまがそう言ったら、戸の隙間から、痩せた手っこを出してよこしたんだと。

「なんと、ばんさま、痩せたこたあ。まず、どれ、指だけ見てもわかんねえから、もうすこし手っこ出してよこせ」

法印さまが手を引っ張ったら、ばんさまの手が、ぐぐぐとのびてきたんだと。

そうして、だんだんに毛が生えてきたつつんだ。もしゃもしゃとね。

「なんの病気だべや。けったいなこともある」

法印さまはおっかなくなって、後ろへ下がったら、ばんさまの手がずんずん長くなって、法印さまを放さないんだとや。「やあやあ、これ。埒もねえことになった」

法印さまは、だんだんに、後ろへ下がって行って、ばんさまに手を掴まれたたまんま、どんぶりと下に落ちたんだとや。

落ちたところは、なんとなんと、さっきキツネをおどかしたあの川だったとしゃ。

こんで えんつこ まんま

第九話 笠忘れ

むかしのむかし、ずっとむかし。

やおよろず八百万の神さまが、紫の雲に乗って、この日本に降りてきたんだと。その時の話なのさ。

このあたりの人が「笠」と呼んでいる土地があんのさ。だが、本当は「笠忘れ」つうんだよ。

むかしむかし、神さまたちが、「おれはどこの国に行って、落ち着いたらいいべか」ってわけで、紫の雲に乗って、笠をかぶってぐるぐる旅していたんだと。

そのとき、姉と妹の神さまがいて、このあたりの空を飛んでいたんだと。

「ちょっと疲れたから休むべ」

と言って、ここの山の上で休んだんだと。

「出羽、奥州へ来たら、どこの国が一番いいんだべか。どこさ行ったらいいんだべか」

二人して、そんなことを話して休んでいるうちに、小春日和だったのか、ぼかぼかして、いつのまにか寝てしまったんだと。

姉さんのほうが、ふと目を覚まして見たれば、妹がいなくて、かぶっていた笠だけがそこにあったんだと。

あたりを尋ねてみたげんとも、はっぱりいなかったと。

いい国のお山の神さまになりたくて飛んできたんだから、姉さんの神さまは、思ったんだと。

「ああ。これは、妹はおれよりも位のいい山の神さまになりたくて、先に行ったんだな」

そのとおりで、妹の神さまは、先回りして飛んでいるうちに、もがみ ちょうかいさん最上の鳥海山が見えたから、「あそこなら立派な神さまになれるな」って言って、降りていったんだと。

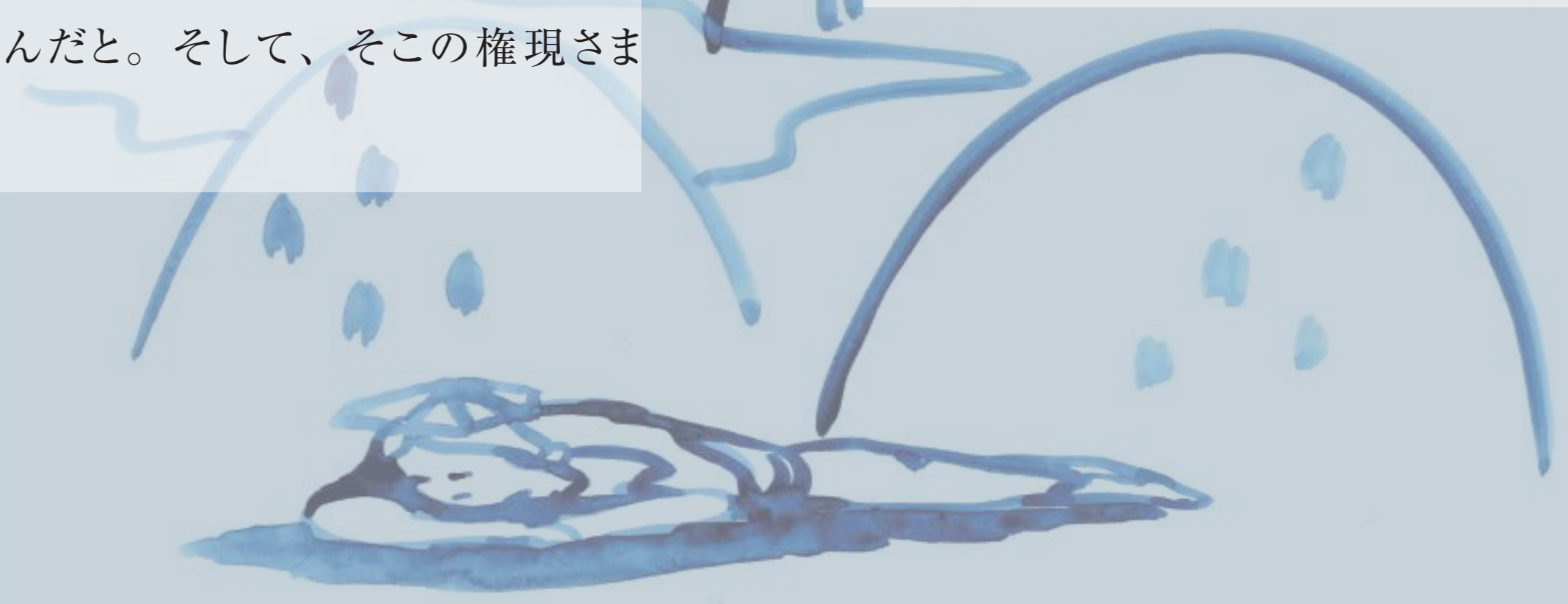
そして、そこのお山の神さまになって落ち着いたんだと。姉を出し抜いて、りっぱな位のいいどこに落ち着いたんだね。

姉の神さまは、口惜しがってや、山から駆け下りて、馬籠の大岩から飛び降りたんだと。そして、落ち着いたところがはしかみ はだ階上の羽田だったんだと。そして、その権現さまになったんだと。

羽田の人たちは、そのあと、最上参詣さ行ったり、出羽参詣したりするとね、途中で、死んだり、病気になったり、ろくなことがないんだと。

それで、羽田の人たちは、いまでも姉神さまのお怒りをおそれて、最上や出羽のほうを参詣しねえんだよ。

姉妹の神さまが休んで、そして、そこに妹の神様が笠を忘れていったことから、そこを「笠忘れ」と呼んでいたのが、いつのまにか「笠」になったということなんだとさ。



第十話

膳の湯は飲むもんだ

むかし、飢饉がつづいたときに、餓死者がたくさん出たっつんだ。

ここも同じで、死人が出て、空き屋になった家も、それは多かったんだと。

あるとき、旅人が来て、暮らしの良さそうな家をさがして、そこに入っていったんだと。

そうしたところが、ちょうどお昼時で、蕎麦を食べていたんだと。

「あんた、どっから来た」と言われて、
「馬籠^{まごめ}からだ」と答えると、
「どこも不作で、これ。あんたも腹減って来たべ。いま、

おれたちは蕎麦を食べていたから、ひとつ、食べていかんせ」と、まず、こうなったんだと。

旅人は喜んで、ご馳走になったと。それから、
「これから、隣村まで峠を越えていかねばなんねえから、これでお暇しす」

と言って、そこの家の人、食後のお湯を持ってこねえうちに、水だけ飲んで、

「ごっつおさんでがした」
って、出ていったんだと。

峠越える山道は、どこもかしこもカヤが生い茂っていたんだと。急な坂道を登っていったわけだな。そして、ようやく下り道になったところ、向こうから登ってきた人があったんだと。手に鎌を持って、カヤを払いながら、登ってきたんだと。

「やあ、どっちから来たのや」

「馬籠から来て、途中の物持ちの家でや、蕎麦をご馳走になってきた。おかげで、腹もいっぱい、坂道も苦労なく登ってきたところだ」

「おめえや、蕎麦をご馳走になったとき、お湯飲んできたかや。それとも水飲んできたかや」

「おれ、いそいでいたから、お湯出されるまで待てねえで、水飲んできたや」

「なにっ、水飲んできたってかや」
「そうだ、水飲んできた」

これを聞くと、鎌を持った男の形相が変わって、いきなり鎌で切りつけてきて、旅人を殺してしまったんだと。

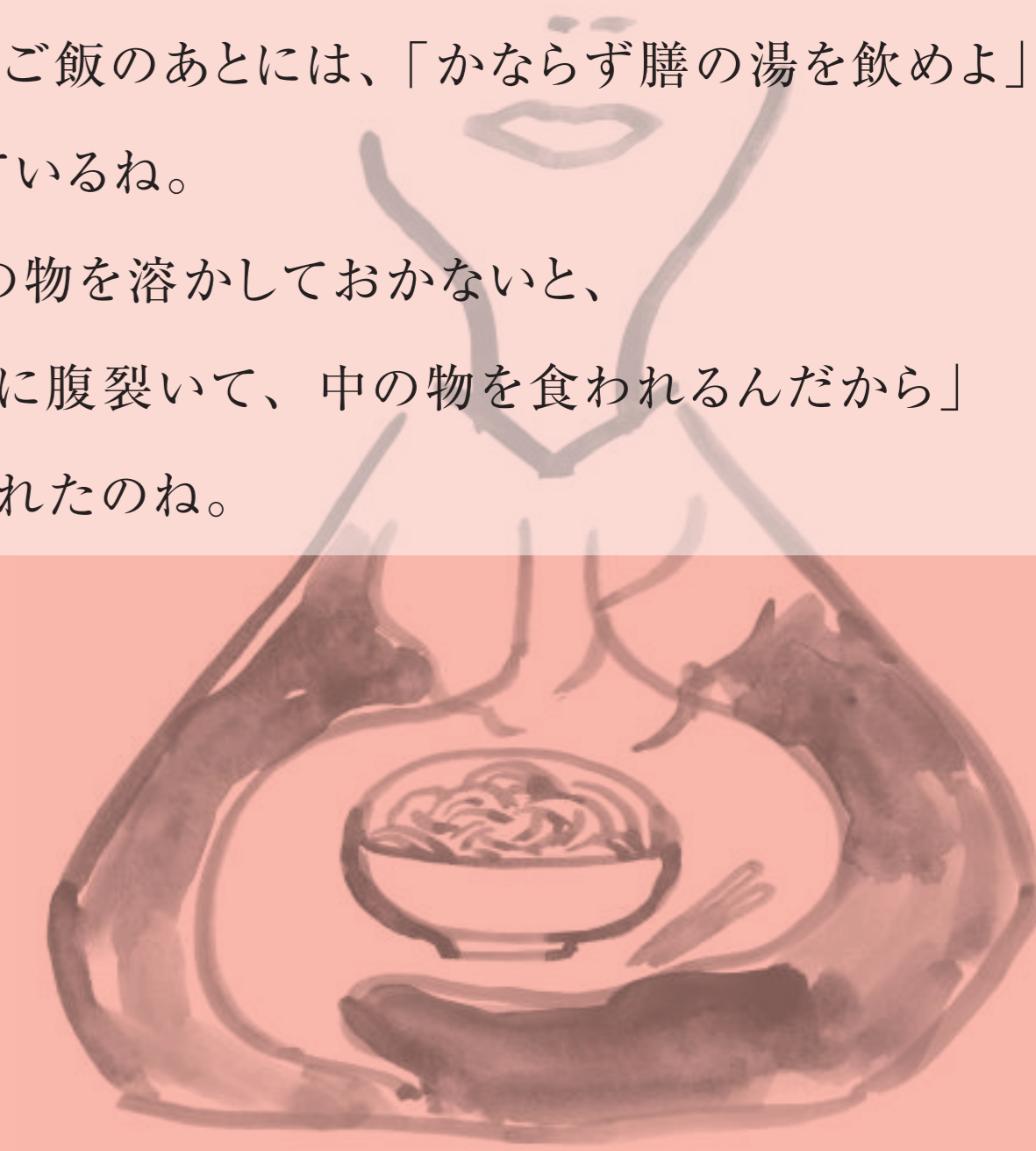
そうしてからに、その腹を裂いて、蕎麦を取り出して、そいつを、がっがっ食べたんだと。

蕎麦というのは、水で冷やすと形が変わらねえもんだ。ただ、お湯につかると溶けてしまうんだと。

腹の中の物まで食われたっつうんだから、おそろしい^{がすどし}餓死年だったんだべね。

今でも、ご飯のあとには、「かならず膳の湯を飲めよ」って言われているね。

腹の中の物を溶かしておかないと、
「餓えた人に腹裂いて、中の物を食われるんだから」
って教えられたのね。



第十一話 歌くらべ

むかし。兄と弟がいて、母親と暮らしていたんだと。

ところが、その母親、兄と弟を、うんと分け隔てるんだと。それもそのはず、兄のほうは先妻の子どもだったし、弟のほうは自分が腹を痛めて産んだ子どもだったんだと。

あるとき、親父がお振る舞い（酒の席・宴会）に呼ばれて、餅をもらって帰ったんだと。

当時、餅というのは、なかなか口に入らねえ貴重品だったから、正月以外は食われねえもんだった。

それで、母親は我が子にみんな食わせてえと思っているいろいろと考えたんだと。そうして、二人に歌をつくらせて、うまく出来たほうに食わせることにしたんだと。

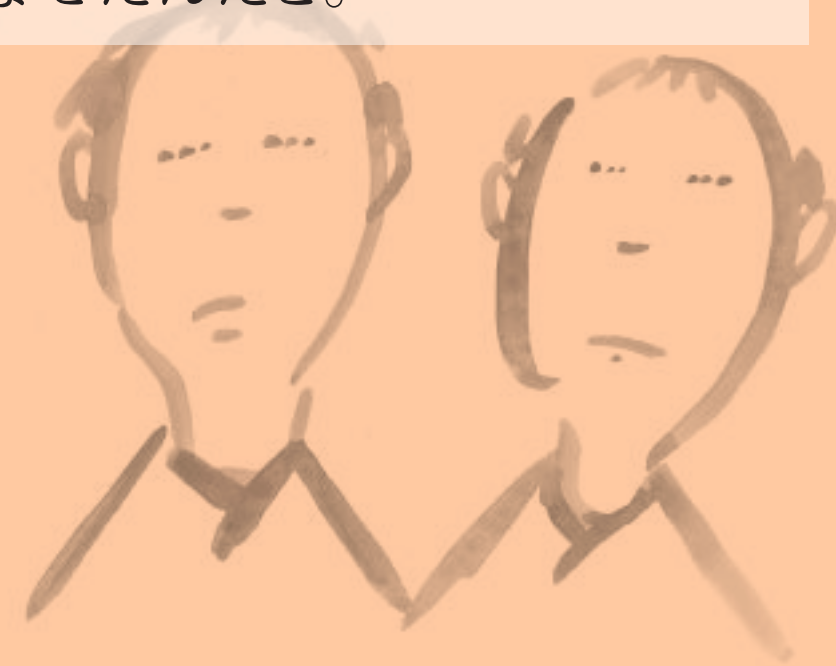
母親は弟を呼んで、言ったんだと。

「これこれこういうわけだから、おまえにいい歌を教えるから、よく覚えておいて歌をつくれよ。そうすれば、おまえは一人で餅が食えるんだから」

そうして、弟には歌を教えてやったんだと。兄には、なにも教えないで、

「お父つあんが餅をもらってきたから、そいつ、ただ食ってもおもしろくねえから、歌をつかって、いい歌つくったほうに食わせるからな。やってみろや」

って言って、二人に歌を詠ませたんだと。



弟のほうが先に詠んだと。母親に教えられてるんだから、すぐに詠んだわけだ。

十五夜の 月に邪魔する 松の枝

伐りたくもあり 伐りたくもなし

まず、さらっと詠んだ。

そして、兄の番になったと。しばらく考えていたが、ゆっくりと詠んだと。

餅切りを なんて欲しがる 母の首

切りたくもあり 切りたくもなし

母親は、この歌を聞いて、たまげてやあ、

「なんだ。なにも教えないのに、あんなに簡単に、しかもおそろしい歌を詠んだ。こんでは末が案じられる。おれも心を入れ替えて仲良く暮らすようにすんべしな。蒔かぬ種は生えぬ、というのはこのこったなあ」

それからは、兄も弟も分け隔てなく扱ってやったので、兄弟も仲良く、なんでも覚えてたし、親の手伝いもよくしたということだ。



えんつこ まんまん